

9月に入ってもまだまだ暑い日が続きます。夏草たちもちょっとお疲れ気味で、大きく広がった葉も虫に食われていたり、伸びすぎた茎は風雨に耐えかねて倒れていたりします。でも、地面のあたりをよーく目をこらして見ると、小さな花がたくさん咲いているのに気付きます。今回は、意外と複雑な、小さな花のしくみを観察してみましよう。

◆ありふれた花のとっても複雑な構造

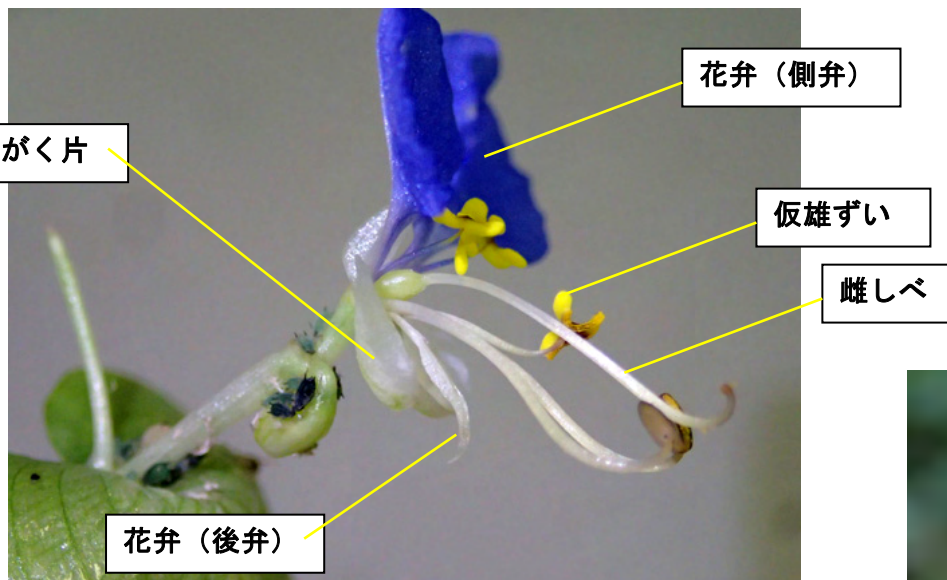
ツユクサは、もっともよく知られた野草のひとつです。花期も長く、梅雨の頃から秋まで咲き続け、さわやかな色合いもあって親しまれています。でも、この花の花びらや雄しべ、めしべの構造をよく見てみると、意外と複雑です。



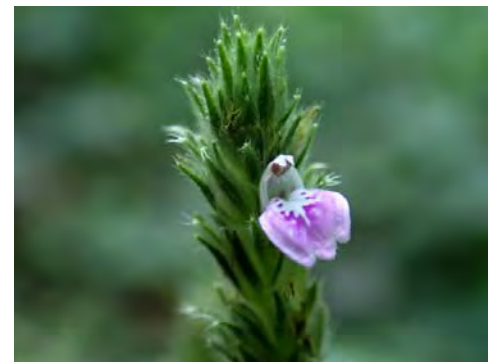
ツユクサ

◆どれが本物のおしべ？

つゆくさの花を左右から包み込んでいる葉のようなものは、苞葉（ほうよう）という葉が変形したものです。それを開いてみると、なにやらたくさんの構造が見えてきます。花びら（花弁）は3枚で、側弁（2枚）と後弁（1枚）に分けられます。また、雄しべがたくさんあるように見えますが、上のほうについている4本は仮雄ずいと言って、かざりのようなものです。本物の雄しべは、雌しべとならんでいる2本です。また、役割のよくわからない突起のようなものもあります。身近な花ですが、意外と不思議で複雑な構造をしていることがわかりますね。ほかにも、キツネノマゴやハエドクソウなど、ごくごく小さな花ですが、よく見ると不思議な形をした花があります。虫めがねでよく観察してみてもいいのではないでしょうか。



ハエドクソウ



キツネノマゴ

次回のお知らせ
ミニ観察会：10月20日（土）11時から
新聞 No. 19 も観察会にあわせて発行します。